SHINGON HORONIC

色は匂へど

IRO WA NIO E DO

PHOTO SHU FUJIWARA

特集　星と真言密教

好評連載　弘法大師の魅力
西宮紘　竹内信夫

平成十一年長月一日発行　巻十二

歌舞伎や音楽会　スポーツ観戦も
今はテレビが部屋の中まで運んで
来ますが
その場の空気や風や香りは
絶対に届いて来ません

コンサートや歌舞伎が高いという
声もありますが
一芸を極めた玄人の演技や演奏を
直接聞き膚で感じられる場は
貴重です

二度と同じ演奏　同じ舞台は
ないのですから

秋の紅葉も毎年彩りが違います

編集主幹　阿部龍樹

特集

星と真言密教　3

日本の心と形　9

現代の道しるべ　11

好評連載

弘法大師の書の魅力

竹内信夫　13

西宮　紘　14

『弘法大師墨蹟聚集（ぼくせきしゅうじゅう）』の全貌

15

新刊紹介

イエスは仏教徒だった

角川書店

空海と最澄の手紙　高木訥元　法蔵館

17

星と真言密教

星と真言密教

お大師さまは若いときに四国の山野を跋渉(ばっしょう)して、大自然と語らい瞑想を深めていました。

ある時、

『谷、響きを惜しまず、明星来影(らいえい)す』

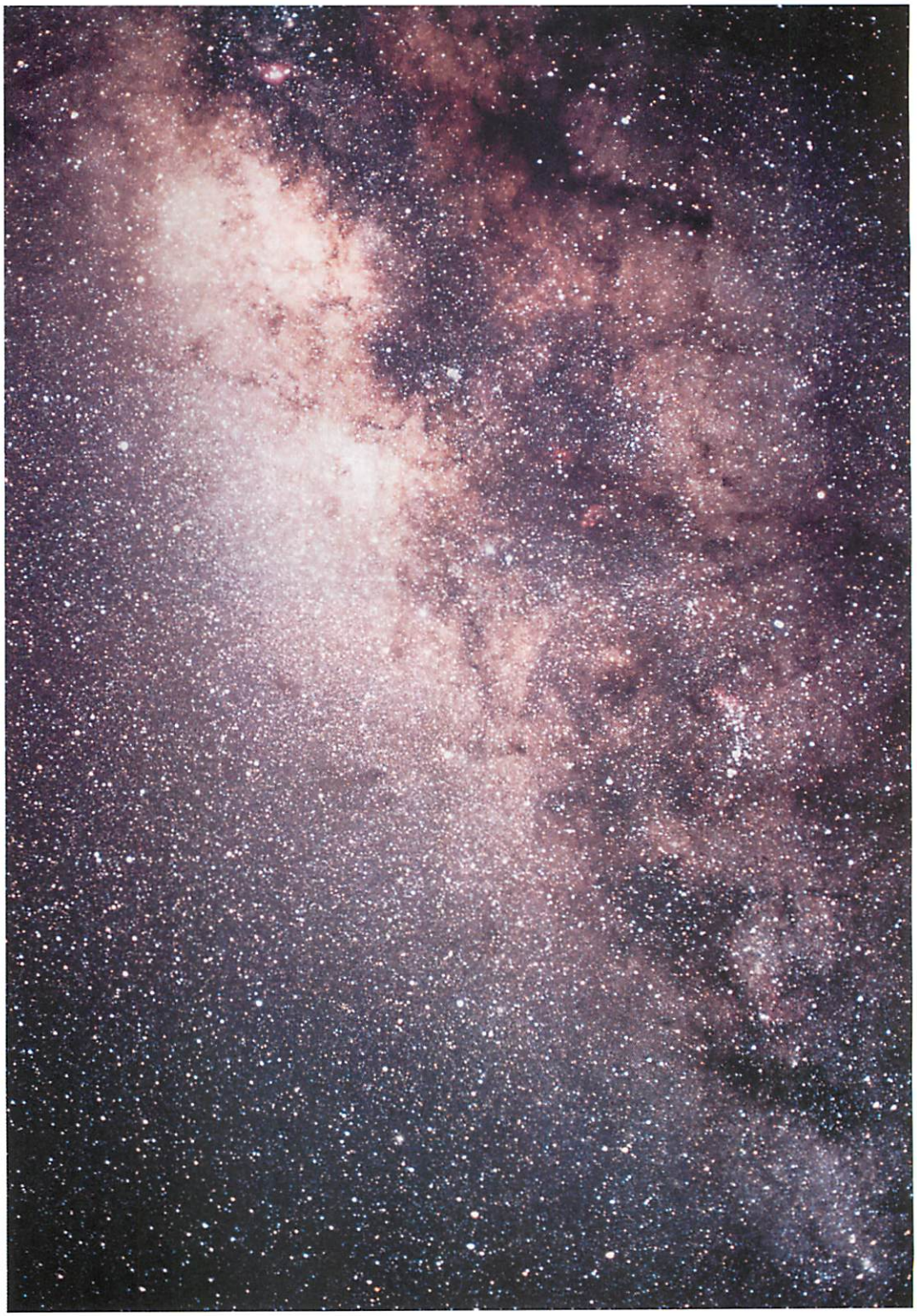
と語っています。

お大師さまが神秘的な経験について語っているのはこのときが最初で最後です。

宇宙が響きあい、己が大宇宙と一体と感じる瞬間。

その一瞬を『谷、響きを惜しまず、明星来影す』この一行に込めています。

写真提供　（株）五藤光学研究所　　撮影　松本博久（p３・６・９）



撮影　五藤光学八ヶ岳天体観測所（Ｐ４・５）

都会では星が見えることも少なく星を見ることも忘れがちですが、子どもの時は誰でも美しい天空に輝く星を眺めて宇宙の果てを想像したり、星が描く星座を考えたりしたことがあると思います。

この数年は、日本人宇宙飛行士が活躍したり、ヘールボップ彗星が飛来し、また昨年は獅子座流星群が見えたりと、宇宙への意識が高まっています。キトラ古墳には美しい天体図が描かれていて、古代から現代まで星は、私たちの限りない関心を掻き立てます。

西洋でも東洋でも昔の賢人達は星の運行を正確に見極めていました。日本には宿曜経というお経が弘法大師により初めてもたらされて、星の運行と万物や人の関係を説かれました。

とくに北斗と呼ばれる北斗七星と北極星は重要な星座です。天宮に大きく描かれ正確に運行する七星と極の一点で動かない北極星が、悟りという究極を目指す仏教徒や神仙を極め不老長寿を願う道教においても重視されていました。

七星にはそれぞれ名前が付けられ、生まれ年（干支）と結ばれそれぞれの本命星（ほんみょうじょう）となっています。

子供のころ山脈の上に昇竜のように立ち上がる北斗七星を見たとき、この星の階梯を登れたら、どんな世界が見えるのかを想像しました。
北斗は正確に24時間で宇宙を一周するので、天空にかかる大時計としても古来から旅人や人々の指針でも有りました。

PHOTO JOUHO−TANAKA

右から

(1) 貪狼星　日輪菩薩　陽徳をそなえる最勝世界
子年の本命星。日・月の精。

(2) 巨門星　月輪菩薩　陰徳をそなえる妙宝世界
丑年と亥年の本命星。月曜・火曜の精。

(3) 禄存星　光明照菩薩　降魔をそなえる円満世界
寅年・戌年の本命星。火曜・水曜の精。

(4) 文曲星　増長菩薩　天理をそなえる無憂世界
卯年・酉年の本命星。水曜・木曜の精。

(5) 廉貞星　依怙衆菩薩　中央四方をそなえる浄住世界
辰年・申年の本命星。土曜・金曜の精。

(6) 武曲星　地蔵菩薩　五穀をつかさどる法意世界
巳年・未年の本命星。木曜・土曜の精。

(7) 破軍星　金剛手菩薩　兵をそなえる瑠璃光世界
午年の本命星。金曜・日曜の精。

なお武曲星は二重星ですが、真言第六祖の一行禅師（六二八ー七二七）はすでに補星を図示していますが西洋ではイタリアのリッチオ一六五〇年に望遠鏡で発見したのが最初と言われています。

日本のこころと形

写真　吉村正治

重陽の節句と七五三
九月九日は五節句のひとつ
重陽の節句です

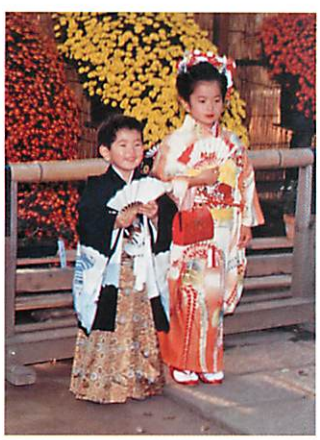
前の日の夜
美しい菊華に綿をのせ
翌朝、菊の露を含んだ綿で
顔にあてると
美しくなると言われています

旧暦の九月九日には美しい
菊が咲き競い

美しく着飾った七五三の
子供達と
よく映えます

美しく着飾って本堂でお参り

お加持を授かり心身の健やかな成長を祈ります



咲き競う菊の前での記念撮影

心身の不自由は進み、
病苦は耐え難し。
去る六月十日、
脳梗塞の遭いし以来の
江藤淳は形骸に過ぎず。
自ら処決して
形骸を断ずる所以なり。
乞う、
諸君よ、
これを諒とせられよ。

平成十一年七月二十一日

江藤淳

江藤淳さんが旅立たれた。自らを処決し形骸を断つ形で。あやしげな知識人や文化人が跳梁ばっこする中で輝く日本の知性の旗手だった。

江藤氏は皇室に近すぎるとか、右過ぎるとか常に言論界では批判されてきた。しかも江藤氏の本も読まずに批判する人が実に多いような気がする。

『閉ざされた言語空間』や『落ち葉の掃き寄せ　一九六四年憲法　その拘束』などを読めば江藤氏が日本に何を求め何を期したかがわかる。

戦後、アメリカの巧妙な占領政策と日本に押しつけた憲法がいかに日本の社会をゆがめてしまったか。

そのひずみを糺すべく政治家に呼びかけても自らの保身と目先の利権にとらわれた政治家には、江藤氏の叫びは届かなかった。

同じころ、アメリカのケネディ二世が飛行機事故で亡くなった。王室を持たないアメリカ国民が王子の死を悼むように弔問や献花の華が絶えなかったのはなぜか。日本の皇室の真の存在理由を江藤氏は見抜いていた。

先日ある家の戦後書き直された過去帳を拝見した。巻頭に

『今時大東亜戦争敗戦後の結果聯合軍の日本弱体化政策により世界に冠たる日本の家族制度は崩壊されつつあり歴史と傳統は軽視されつつあり良き風俗習慣は失われつつある現状に鑑みて（特に若者に於いて顕著なり）年長者の健全の間に子孫の為に祖先を明らかにせんとする願や切なるものがある』

と書かれていた。

今アメリカでは自分の先祖がわかるインターネットホームページが開かれ、ものすごい数の問い合わせが殺到している。

ぜひいま心有る人は、江藤氏の著作を繙き未来への礎として欲しい。

心からご冥福を祈ります。

『閉ざされた言語空間』文春文庫

好評連載

弘法大師の書の魅力

竹内信夫

大師のお弟子のなかに真泰（しんたい）と呼ばれる方がおられた。今回は、今までと少し趣を変えて、この真泰という方について、また大師がこの弟子に注いだ眼差しについて書いてみたい。

真済（しんぜい）、真然（しんねん）、真雅（しんが）、真如（しんにょ）というような著名な弟子たちと同じように、「真」の字を冠しているところから、真泰は大師の直弟子の一人であっただろうと推測される。真済は『性霊集（しょうりょうしゅう）』の編纂者として、真然は高野山第二世として、真雅は貞観寺開創を以て、真如法親王は大師の迹を慕って入唐し、さらにそこからインド求法の志を高く掲げられた求道者として、真言宗草創期の歴史に燦然たる名を残されている。しかしながら、これらの弟子に交じり、大師の薫陶を深く承けられたはずの真泰という方の事蹟は杳として知られない。

ただ不思議なことに、大師の書翰を集めた『高野雑筆集』のなかに、伝教大師亡き後、天台座主となった義真闍梨（ぎしんじゃり）に宛てた真泰の手紙が収録され、今に伝えられている。

その手紙は「北山座主（ざす）真闍梨」に宛てて、当時、高野山に住していた真泰が書いた返書である。真泰は「南嶽沙門真泰（なんがくしゃもんしんたい）」と署名している。この署名は、大師が、高野山に入住された頃、しきりに使われた「南嶽沙門遍照」という署名を懐かしく思い出させてくれる。その手紙の文面には「南嶽と北山と處（ところ）異なるも心は同じ」というような文句も書かれていて、高野山から真泰が義真にエールを送っているようにも思われる。未だ面識はないものの、この二人が互いに知り合っていたことは文面から推測できる。手紙の日付は十二月十一日とある。想像するに、伝教大師の亡くなられた弘仁十三年から余り時を隔てない頃に、この手紙は書かれたものであろうか。この推測が正しいとすれば、大師が東寺経営のために忙しくなり（東寺が大師に給預されたのは弘仁十四年）、高野山を下らなければならない時期にあたっている。

この頃から天長年間に亘って、わが大師には高野にゆっくりと帰られる機会がなかった。大師の留守の間、高野を預っていたのは大師の甥の真然であるが、真泰も高野にあって、「法身の里」高野の建設に力を合わせていたものと思われる。

さて、『高野雑筆集』には、この他に、大師が高雄（神護寺）に居られた頃、弟子の「泰金剛」に宛てた手紙が四通載せられている。この「泰金剛」が誰であるか、確かなところはわからないのだが、大師の書翰研究を開拓された高野山大学の高木訥元先生は、真泰と同一人物であるとされておられる。

それら四通の手紙は一連のもので、内容は、長谷から室生辺たりの山中で、病気をおして修行に励む弟子「泰金剛」の健康を心配し、薬や塩を送り、養生の法を教示する内容になっている。無理をして苦行をしてはならない、という戒めも書かれている。激し過ぎるほどに修行に打ち込む弟子を諭し、その一方で優しく、細やかな心遣いを見せる大師の姿がそこにはある。

「稍（やや）平復することあらば、早く房に帰り、相憶の情を慰めよ」、高木先生の訳（『空海と最澄の手紙』法蔵館、平成十一年）をお借りするならば、「多少とも快方にむかったなら、早く山房に帰って、安心させて下さい」、という慈父の言葉がそこに書かれている。この言葉には、単なる密教の指導者というのではない、何かもっと普遍的な人間性の響きが感じられる。

大師の人間性（ヒューマニティ）に直接触れる思いがするのは、こういう日常のなかで書かれた大師の文章を読むときである。特に、真泰への手紙には、何の文体的構えも無くそれが自然に流露しているように思われる。

そこに感じられる大師のヒューマニティは、時代を問わず、状況を問わず、人として生きる勇気の源泉となるものではないだろうか。菩薩は自利と利他の二つの行を実践しなければならないとされる。その「利他」とは、詮ずれば、人に生きる勇気を与えてくれるような慈しみの実践なのではないか。そして、そのような、私たちに身近な、しかしその実践の決して容易ではない利他行の上に、大師の宗教は築かれているのではないか、と思う。

竹内信夫　１９４５年生まれ　東京大学大学院綜合文化研究所教授　著書『空海入門』

弘法大師の魅力

精神文化史　研究家　西宮　紘

お大師様の芸術論

前回までに、私たち凡人の三業のトリコトミーについて述べたのであるが、これと仏の三密のトリコトミーとの一体化というものが主題となるわけであるが、この問題について、お大師様の芸術論を通じて考えてみたい。お大師様が芸術についてかなり具体的に論じておられるのは、書道と文学についてである。前者については、弘仁七年（八一六）八月十五日にお大師様が嵯峨天皇に上表された「勅賜の屏風を書し了って即ち献ずる表」と題されている上表文の中においてであり、後者については、お大師様の大著『文鏡秘府論』の中で述べられている。これら両者の比較を通じてお大師様の芸術論の核心がどこにあるのか探ってみよう。

まず書論については、後漢の書家である蔡邕の『筆論』から引いて「書は散である」とされる。この場合、「散」とは、心とその作用を天然自然の状態に解放することを意味している。しかし、お大師様は、それだけではいけない。「心を境物に遊ばしめ」、思いをそれに集中しなければならない、と述べておられる。その上で、「法を四時に取り、形を万類に象るべし」と言われる。ここに出てくる「境物」とか「四時」「象る」といった言葉については、後でじっくり考えることとして、ここで大切なことは、心を境物に集中させるということである。この状態を、お大師様は「静慮」あるいは「禅定」と述べられているが、このことについても後でじっくり考えよう。次に、文学論の場合はどうであろうか。

『文鏡秘府論』南巻「論文意」の中で、「詩を作るには」「心を凝らして、その物を目撃すべし、すなわち心をもってこれを撃ち、深くその境を穿つ。高山の絶頂に登るがごとく、下に万象に臨みて、掌中に在るがごとくし、これをもって象を見れば、心中にあきらかに見る」と述べられ、さらに、文章はそれを作る人の本性とかかわりが深く、つきつめれば、「至解に属す、それなお空門の証性に中道有るがごときか」と述べられ、「神をもって会すべし」とされている。「至解」とは至上のさとりの意味であり、「空門」とはここでは仏教そのものを指し、「中道」の「中」という語はなかなかやっかいな語で、これも後でじっくり考えてみよう。「神をもって会す」という一文も容易ならざる意味を含んでおり、ここにこそ、「静慮」ないし「禅定」の真骨頂があると思われる。これらお大師様の書論と文学論の核心部分をこうして並べてみると、驚くほどの一致が見られる。

いや、一致というのはおかしい。書論であれ、文学論であれ、お大師さまはある確固とした視座から論じておられるのである。書論においては、「心を境物に遊ばしめ」と言われていることが、文学論では、その境に心を「凝らし」「目撃」することであり、それは「撃ち」「穿つ」ことであると、より具体的になり、「万類に象る」は「万象」を「掌中」にすることによって「心中にあきらかに見る」とされている。芸術としての書も文学も仏道とはジャンルとしては別のものでると認められた上で、しかしその本質、真髄においてはなんら変わるものではない、というのがお大師様の主張なのである。ジャンルとして別であるという正確な認識は、「空門の証性に中道有るがごときか」という表現によって示されている。ここには世界の多様性についての本質的な把握が示されており、多即一という視点だけではだめだということになる。

『弘法大師墨蹟聚集』その全貌

いよいよ刊行がせまった『弘法大師墨蹟聚集』の全貌を紹介します
個人の書がこれほどの質と量を今に伝えられている、その凄さが
おわかりいただけると思います。

第一帙　平成十一年十一月配本

一巻　国宝　聾瞽指帰　上　金剛峯寺

二巻　国宝　聾瞽指帰　下　金剛峯寺

三巻　国宝　大日経　西大寺

第二帙

四・五・六・七巻　国宝　三十帖策子　仁和寺

第三帙

八巻　国宝　真言七祖像並に行状文　東寺

九巻　重文　御請来目録　寶厳寺

十巻　国宝　御請来目録　東寺

御請来目録　施福寺

第四帙

十一巻　与本国使請共帰啓　宮内庁

与越州節度使内外経書啓

[法華経と般若心経]

国宝　一字一佛法華経　善通寺

般若心経
唐招提寺
般若心経
廣隆寺
重文 仁王経疏
勧修寺
神護寺額字
京都市立藝術大学
国宝 狸毛筆奉献表
醍醐寺
国宝 嵯峨天皇宸翰光定戒牒
延暦寺
十二巻 国宝 風信帖
東寺
国宝 潅頂暦名
神護寺
国宝 久隔帖
奈良国立博物館
尺牘（贈傳教大師書）
施福寺
南圓堂燈臺銘
興福寺
十三巻 国宝 金剛般若経開題
京都国立博物館
第五帙
十四巻 重文 金剛頂瑜伽経
高山寺
国宝 大日経疏要文記

醍醐寺
十五巻 重文 即身成仏品
金剛峯寺
真言付法傳
東寺
重文 金剛童子法
前田育徳会
金剛乗額字
東寺
八幡宮額字
東寺
十六巻 重文 二荒山碑銘
神護寺
二荒山碑銘
醍醐寺
第六帙
十七巻 重文 益田池碑銘
釈迦文院
十八巻 重文 崔子玉座右銘
宝亀院
飛白十如是
神護寺
十喩詩跋尾
東寺
十九巻 重文 綜藝種智院式並序
上杉神社
第七帙

二十巻 文鏡秘府論
宮内庁
重文 文筆眼心抄
山田家
二十一巻 国宝 篆隷萬象名義
高山寺
二十二巻 [弘法大師その時代の書]
国宝 新選類林抄
京都国立博物館
重文 急就章
萩原寺
孫過庭書譜
宮内庁
孫過庭書譜
陽明文庫
河嶽英霊集
陽明文庫
伊都内親王願文
宮内庁

平安時代前期の名蹟を網羅する
弘法大師墨蹟聚集
○三筆 弘法大師・嵯峨天皇・橘逸勢の書
○伝教大師の書
○伝弘法大師の名筆の数々を
全二十二巻に収載

新刊紹介

イエスは仏教徒だった？

エルマーグルーバー+ホルガーケルステン

同朋舎+角川書店

「すでに2世紀には、キリスト教の教会は仏教と新約のテキストのあいだの見かけ上あるいは内容上の類似に気づいていた」「高名な宗教史学者であり神学者でもあるA・リュバクはキリスト教文献に仏教からの借用があるとする考えを示したところヴァチカンから譴責され検問された（中略）最新の研究からすればキリスト教の成立基盤に仏教が関わっていたことは疑いの余地はなく、ただ、どのようにしてこれほどの規模で異国の宗教の中身が取り込まれたのかという問題が残るのみである」本文より

空海と最澄の手紙

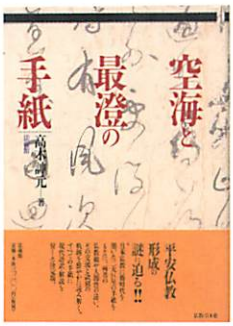
高木訷元　法蔵館

奈良時代から平安時代へと大きな扉を開いた空海と最澄の日本史上の巨人の消息を紹介し、現代語訳を付けた。

今号の竹内先生の『お大師さまの魅力』にも引用されている。

手紙には構えて書いた書や論と違い書き手の感性や人への心の眼差しまでがくっきりと浮かび上がる。

空海の手紙を六十三通、最澄の手紙を四十八通紹介。



『弘法大師墨蹟聚集』刊行せまる

いよいよ『弘法大師墨蹟聚集』がその全貌を顕し始めた。

詳細は十五、十六頁に掲載したとおり弘法大師の書のすべてを収録する未曾有の企画が、ついに配本がこの秋より始まる。

弘法大師の生涯の書を眼で逐いながら、その多様な活躍の根元を顕現させる、書の曼荼羅世界。

一人の書がこれほど多く国宝や重文に指定され今日まで伝えられたことは、他に全く例がないだろう。

特製の表紙と新たに開発された和紙で巻物はすべてつなげた状態で見られる印刷の最新技術。

一人でも多くの方にこの素晴らしい世界、書の曼荼羅世界にふれていただきたい。

お申込、お問い合わせは
『弘法大師墨蹟聚集』刊行会事務局まで
電話　03-3705-7238
ファクス03-3705-1190

読者から

梅雨休みに、永久保存版となるべく「色は匂へど」巻十一号が堂々と到着いたしました。

弘法大師の「書の曼荼羅世界」は見事です。わくわくと貪り読みました。竹内先生の現前性の論旨にも通じるのでありましょうが、西宮先生の書曼荼羅へと導かれた文章の展開に引きつけられました。

書写されながら感性が揺り動かされる様は何やら共感（小生ごときが失礼ではありますが）いたしました。

極めて密度の高い小冊子でした。ありがとうございました。　代官山F

＊上野の法隆寺宝物館が新たにオープンしました。今までは古びた建物の中で週に一度、木曜日だけの展観でしたが、これからは谷口吉生氏の美しい設計の建物の中で、月曜日の休館日以外は毎日見られます。天平の美しい佛菩薩が素晴らしい照明の中で輝いています。

法隆寺は明治初年まで真言宗でしたが明治になって聖徳宗となりました。激しい廃仏棄釈の嵐の中で皇室にゆかりのある宗派名に変え法隆寺の存続をはかりました。真言宗から離れる会議は真言宗智山派の本山、東山七条の智積院でおこなわれました。上野に展観されている法隆寺献納宝物は名前からわかるとおり、法隆寺が明治時代になって天皇に献じたものです。

興福寺の五重の塔が当時の十円で売られようとした時代です。（興福寺の塔は地元の人々の努力で残りました）寺院の存続のため法隆寺の多くの宝物が奈良から東京へ運ばれ、今新たな建物の中で光をえています。

照明計画は豊久将三氏です。（ニューヨークの近代美術館の照明計画にも参加しています。）

＊プロ野球では西武の松坂投手と巨人の上原投手の活躍で前半戦からオールスターまで大きく盛り上がりました。ともに「感性がすばらしい。とにかく素直な選手」という評価です。プロでの経験ない彼らが、大きな活躍を可能にしているのは、その『感性の力』でしょう。球場ごとに異なるマウンドや風の微妙な違い、打者の心を感じる力です。秋の夜長に感性を磨くには何がいいのかを考えてもいいと思います。

＊ヨットに乗りました。

『七福神』という友人で建築家の原尚さん（今最も多く寺院建築を日本中に手がけています。）のヨットです。ヨットに乗る前にパワーボートも乗りましたが、ヨットの静けさが際だっていました。偶然、石原裕次郎氏の一三回忌の命日にあたり、裕次郎灯台で合掌しました。

E-mail　ryuju835@ra2.so-net.ｎｅ.jp
www02.so-net.or.jp/~kukai168/

次号新春号は12月1日　予定

特集　白吉兆　湯木貞一の世界

新連載　こころの絵ことば

Editor RYUJU ABE　Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA　Special Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA
Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE　EDITOR RYUJU ABE　EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158-0082　東京都世田谷区等々力3-15-1　電話03-3705-1622　ファクシミリ03-3703-4979

SHINGON HORONIC IROWANIOEDO　第一巻第十二号　平成十一年長月一日発行